

2024年度の琵琶湖における餌料プランクトン生息量

太田滋規

1. 目的

アユ等の餌料生物として重要な甲殻類プランクトンの2024年度の生息量を評価する。

2. 方法

毎月中、末旬に彦根港と安曇川河口を結ぶ線上の5定点で、目合95 μ mの北原式定量ネットを用いプランクトンを層別採取し、種類別に個体数を計数した。分類群ごとに個体数密度(個体数/ℓ)を求め、st1(0-5m)、st2(0-10m、10-20m)、st3(0-10m、10-20m)、st4(0-10m、10-20m)、st5(0-5m)の8層分の個体数密度の合計値を生息量指標値とした。

3. 結果

図にケンミジンコ類ノープリウス期幼生、同コペポディド期幼生+成体、ダフニア属、ゾウミジンコ属、オナガミジンコ属の生息量指標値の季節変動を、2017年度から2023年度の平均、最大、最小の比較で示した。2024年度のケンミジンコ類ノープリウス幼生は、6月~11月まで過年度よりも著しく低く、アユのふ化後の初期餌料として重要なため、影響が危惧された。ケンミジンコ類コペポディド期幼生+成体は過年度と比較して9月を除いて低い、または同水準で推移した。ダフニア属は8、10、11、3月が過年度より著しく低い値で推移していたが、それ以外の月はおおよそ同水準であった。ゾウミジンコ属は4月か

ら11月まで過年度に比べて著しく低いか、低い状態が続いたが、12月と翌2025年1月は一転して著しく高い値となった後、平年並みとなった。

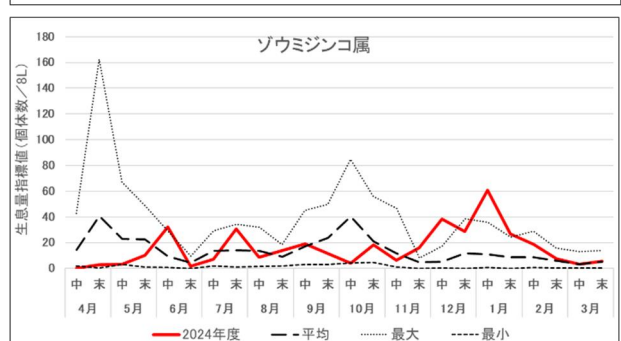
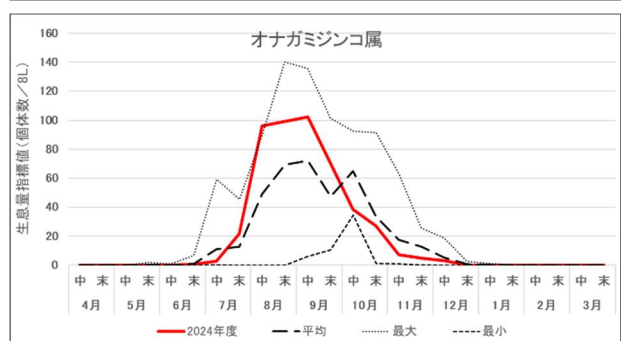
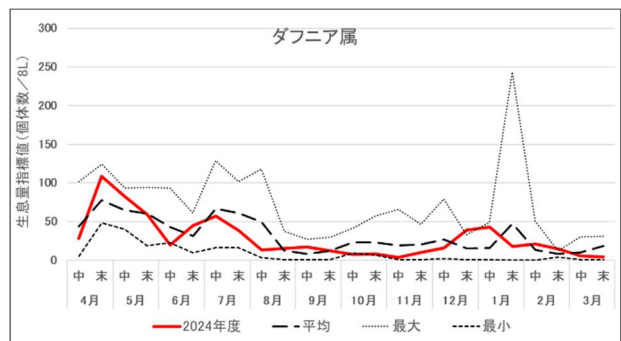
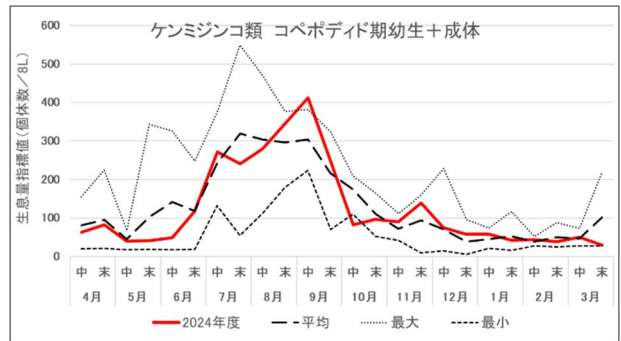
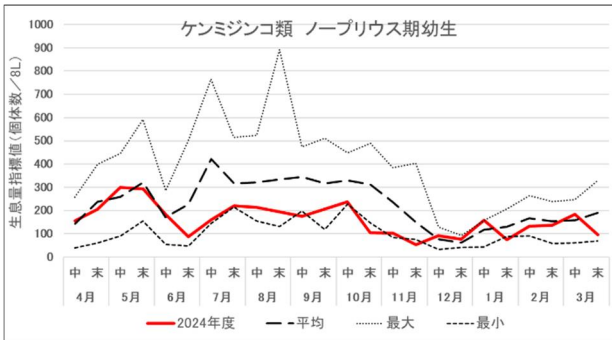


図 各分類群の生息量指標値の推移